

教職大学院

Newsletter

No. 24

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2010.07.27

学校のキャプテン「スクールリーダー」養成に期待

福井県教育庁嶺南教育事務所長 岡本 章

いきなり私事で恐縮だが、私はスポーツ観戦が大好きである。中でも、各プレイヤーの役割分担が明確で、なおかつベンチや応援席からのサポート体制が伝わってくるような、いわば「一体感のあるチームワーク」を必要とする競技をよく観る。

また、部活動顧問をしていたころ、試合に出る選手に役割を促したところ、試合前日に背番号を渡すときの子どもの不安そうな眼と背番号をもらえなかった子の落胆ぶり、しかし、大会ではそれらを払拭して応援する姿、さらには、保護者サイドからの声援や激励などは、この年になってもはつきりと思い出せる。そして、夏の甲子園の表彰式では、特に、準優勝校がメダルを掛けてもらう場面になると、もうダメである。テレビの画面が涙でかすんでしまう。

ところで、チームには、顧問や監督といった管理者・指導者ももちろん必要であるが、ゲームをするのは選手であり、「一体感のあるチームワーク」には仲間をまとめる力を持ったキャプテンの存在が不可欠である。

教育現場でも、また、家庭・地域・学校という枠組みでも、この「一体感のあるチームワーク」は通ずるところがあると思う。学校の内外で、それぞれの役割分担と意志疎通がしっかりとできていくところは特色もあり、強く安定もしている。また、常にピンチに備えているため、少々のことではビクともしない。

学校が様々な課題を抱え、組織としてのスピードと透明性のある対応が求められることが多くなった今、安定した学校づくりのためには、正に、この「一体感のあるチームワーク」が必要であり、そこでは管理職のもとで最前線の教職員をまとめるリーダー（学校のキャプテン）の存在・不在が大きな意味を持つてくる。しかし、日々の教育活動を推進しながら、学校現場だけで力強いキャプテンを育てるのは相当に困難である。

時代の要請と現場からのニーズにこたえ、次のような大きな特徴を持つ福井大学教職大学院は、リーダー養成にとどまらず、ひいては本県の更なる学校力・教師力の向上に貢献してくれるものと思われる。

第一に「拠点校方式」である。これは、福井大学の専任教員が院生の所属校を定期的に直接訪問して大学院教育を行うものであり、特に、遠方の学校に在籍する院生にとっては非常にありがたいことである。このことにより、今まで院生になることを躊躇していた現場教員が積極的に手を挙げやすくなっている。

第二は「学び合い」である。私は現任地でも参加型の研修を多くするように言っている。講義を受けるだけでは不十分で、やはり理論に裏付けされた実践が必要であり、その意味では、将来のキャプテン候補同士が、今までの現場経験をベースに、教職大学院での学習内容と自らの役割や構想について話し合い、示し合い、刺激し合い、学び合うことはとても役に立つと思う。

このように福井大学教職大学院で養成されたスクールリーダーが、2年後には名実ともにⓈや黄腕章などのキャプテンマークを付けて学校現場に戻り、その手腕を発揮してくれることを大いに期待したい。

また、できれば、この仕組みがモデルとなって全国展開され、何十年か後に「平成20年代当初の福井大学教職大学院の方式が、日本の教師教育改革の出発点だったなあ。」と振り返られることも期待したい。

内容

学校のキャプテン「スクールリーダー」養成に期待(1)

ラウンドテーブルを振り返って(2)

拠点校だより (8)

院生紹介 (10)

ラウンドテーブルを振り返って

2010年6月26日(土)、6月27日(日)の両日に渡り、「専門職として学び合うコミュニティ/実践研究福井ラウンドテーブル2010」が開催されました。休日にもかかわらず、県内外から学校教育、社会教育、特別支援教育、医療・看護分野の延べ200名を超える専門職が福井大学に集結しました。参加者それぞれが、「専門職としての実践力をどう培うか」をテーマに、領域を超えて実践を語り合い、学び合う中で、新たな実践のヒントと元気をそれぞれの職場に持ち帰ることができたなら幸いに思います。ここでは、参加者8名の方々からの報告を掲載します。

2010.6.26 (sat)

専門職として学び合うコミュニティ

Session1/Session2では、学校教育、社会教育、福祉・特別支援、医療・看護 という4つの領域に分かれて、専門職としての実践力を培う学びをどう実現していくか、それぞれの職場・地域・大学での取り組みをふまえて語り合いました。



Session2 「専門職として学び合うコミュニティ」
〈特別支援教育〉 全体会 (写真上)
〈学校教育〉 高校分科会 (写真右)



Session1 「専門職としての実践力を培う/全体会」



2010.6.27 (sun)

実践研究福井ラウンドテーブル2010

Session3では、分野を越えた4~5人の小グループで実践の歩みを語り合い、聴き合い、学び合いました。

Session4で、また前日のグループに戻り、2日間のセッションを通じて聴き取ったことや考えたこと振り返って語り合いました。



Session3
「実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る」

教育的営みにおける領域や対象を越えた実践的見識の蓄積と共有

宇都宮大学教育学部特別支援教育講座 岡澤 慎一

「ラウンドテーブル」を始めとする教員の専門性をめぐる福井大学の種々の取り組みには、かねてより強い関心を持っていた。今回、特別支援教育に関わる領域において実践報告の機会をいただき、初めて「ラウンドテーブル」に参加することができた。2日間、私が語り、そして歩んで来られた歴史が各々異なる3人の方々の実践報告を聴かせていただいた。その後、語り手や傾聴する方々の表情や態度、語りの内容、報告者と参加者とのやりとりを繰り返し思い起こし、その余韻に浸りつつ宇都宮に帰ってきた。ここでは、帰路、私の頭に思いめぐったことを文字にして報告とさせていただきたい。

私は、大学において教員養成の仕事に携わるとともに教育相談あるいは学校や施設、病院への訪問というかたちで障害がある子どもさんや成人の方との教育的係わり合いを継続している。今回は、私が大学院1年次から現在に至るまでの比較的長期間の成人の方との経過を映像資料の助けを借りつつ語らせていただいた。この方との経過については、これまでも大学の講義や種々の研修会などで繰り返し紹介してきたものであるが、語るほどに新しい気づきがある。語るなかで、実践しつつも不明瞭であった自分の考えが次第に浮き彫りになっていく。そして、新しい気づきに基づいてこれまでの実践資料を振り返るなかで、語りはいっそう深みを増していくとともに今後の実践の方向性も見出されていく。そしてこうした営みにはよき聴き手が欠かせない。今回、私の語りを聴いていただいた方々からは、ご自身の経験と重ね合わせた意見や感想をいただくことができ、改めて自身の仕事のあり方を問い直すことができた。

また、3人の方々の実践報告は、語り手の経歴も年齢も実

践の場も相手となる人も全く異なるものであったが、いずれについてもその語りに没入して聴かせていただいた。私の最大の関心は、人と人が人生のある瞬間に偶然出会い、特に教育的といわれる係わり合いの継続のなかで、お互いに生じていることは一体何なのか、ということである。そう考えると、教育的営みにおける実践的見識は、領域や対象を越えて蓄積され共有されていくことがしごく自然なことのように思われてくる。荒木氏の報告は地域で生活する視覚障害がある子どもさんへの長期間に渡る教育相談担当者および担任としての支援の経過、柳原氏の報告は自身の教師としてのライフストーリーと中学校の総合的な学習の時間における実践の経過、北島氏の報告は特別支援学校の長期インターンシップにおける子どもさんとの係わり合いにおいて生じた自身の意識の変化についてであったが、いずれも私のなかで私自身の経験と重ね合わせつつ位置付けられ、今後、私の実践を支えてくれるものと思っている。

私の仕事の領域は特別支援教育といわれるが、これは、結局、人と人の係わり合いであり、お互い多様な条件を抱えつつ生命活動を展開する係わり手と係わられ手との双方に生じる障害状況からの立ち直りを目指した創造的営みということである。このことは特別支援教育に特化したことではないし、また、特別支援教育が何も特別な営みではないということでもある。領域や対象の異なる実践の語りを聴き合い、このことを改めて実感した次第である。

「前に進む勇気が湧き上がる」福井大学ラウンドテーブル

お茶の水女子大学大学院 吉見 江利

今回は専門領域、ラウンドテーブル、専門領域という構成で、実践への展望に手ごたえを感じることができた。

その流れを追うと、自身の関心により、まずSession2では②コミュニティの学習を支援する専門職の領域に参加した。福井市の各小学校区にある公民館に地域人であり公民館主事

として勤務されてきた中島さんより、研修で出会った福井大学の柳澤先生と毎月20年以上、自主主事会「つむぎの会」を継続していること、福井の公民館のことがわかる冊子「福井の公民館」の作成、多様な団体の活動を「次につなげ」、連携させてきたことなどの先進事例をお聞きした。

翌日のSession3の「実践研究ラウンドテーブル」では、学校教育関係者4名、院生1名と私、という構成の中、まず私が江戸川総合人生大学（区長部局に設置された区民大学）で子ども支援学科の学習支援者としての1年の実践、現場を離れて書いた修論内容と現実とのギャップを感じ、今後の論文構想に悩んでいるとお伝えした。次に福井大学教職大学院、小学校教諭多田昌弘先生の「教師が協働する校内研究に向けて」の報告で、校内研究を工夫してこられた先生は、授業報告者が公開授業をして良かったと思える校内研究を模索していると語られた。異分野の私自身、学習者の主体性を育む活動で自身の関わり方に悩んでおり、参加者の方々からの質問や共感を伴う助言1つ1つが私の心にもしみ入る実感があつた。特に幼稚園副園長先生の「子育て支援について地域の大

人たちが熱意を持って学習し、親を巻き込んだ支援活動が考えられていることに勇気づけられた」という言葉に私自身も励まされた。

Session4では、Session1と同じグループに戻り、全体を振り返り、異なる専門分野でも同じように子どものことを懸命に考え、教育に関わる熱心な取り組みがなされていることに共感し、他領域とのつながりを実感し、実践で感じている限界や壁を乗り越える勇気や意欲が出てきたことを確認した。そして実践を省察し継続的に本音で語り合う場、共感する仲間の存在が、壁を超えコミュニティを実践的な組織へ変化させるのではないかと、という展望を持つことができた。

参加し「明日も頑張ろう」という勇気が湧き上がってきた。関係者の皆様、出会えた方々に大変感謝しています。

私の福井ラウンドテーブル

ダイトーケミックス株式会社 福井工場 梶山 委都子

5回目になる福井ラウンドテーブルで待望の(?)報告をしました。しかも、二人分の時間を独り占めです。ラウンドテーブルが何をどうするものなのか、何も知らずに参加したのは5年前の3月でしたが、あの時ビギナーズラックよろしく「おもしろい」と思わなかったら今回のことはなかったと思うと不思議な気分です。私は看護職（保健師）なので、Session2では医療・看護の専門職における実践力形成に参加しました。大学で基礎教育を受けたので看護師だったこともあるものの、看護師および看護師教育における実践力の話題には少々距離を感じました。また、ラウンドテーブルが縁で、孟母三遷とばかり娘を至民中学に入れるために福井に引っ越して来たという滅多にない話題提供者であったこともあり、中学校の懇談会では人見知りをして言えない「保護者の本音」を聞いてもらえたことのほうが印象的な時間でした。2日目の、楽しみにしていた報告では、共感的に報告を聞いていただき、「看護も教育も同じですね」「実践力って暗黙知になっているのかもしれないよ」と、聞いたとたんこれが聞きたかったんだと思えることばをもらえてうれしかったです。

そういう当日の楽しみもさることながら、今回は知人がラウンドテーブルに初参加して、終わったあとにあれこれ感想を言い合えたこともいい経験になりました。彼女は看護職によるちょっと変わった学習会の中心人物なので、初めてのラウンドテーブルでどんなことを感じるのだろうかと思っていましたが、第一声が「おもしろかったよ」で一安心（誘ったてまえ、「つまらない」などと言われるとやっぱり困るので）。でも、看護現象を研究素材にする過程で厳しく事実を見つめる訓練を続けている彼女の、鋭い指摘には考えさせられることもありました。たとえば、異職種の彼女の疑問が同職種間では当然のこととされることへの危惧や、共感的であろうと努力しているようすが痛々しいほどだったという感想など。ラウンドテーブルは一期一会の実践です。何度も参加している私にとっても、初参加の彼女にとっても2度と同じラウンドテーブルはありません。だから折に触れてふり返って考えたり、誰かと話したりすることに意味があるのだとも思いました。

ラウンドテーブルに初めて参加して

光道園 ライトトレーニングセンター 吉田 茂

今回、初めて、福井大学のラウンドテーブルに参加させて頂きました。参加者は、学校の先生が中心で、他に看護師の方や私のような福祉施設の職員などいろんな職場や立場の方が参加をされていました。いろんな分野の方と2日間、真剣に語り合えたこと、とても貴重な体験をさせて頂きました。

初日は、4つの領域の中から、「特別なニーズのある人との係わり合いから何を学ぶか」の分野に、発表者として参加しました。今回、私が勤務している福祉施設の盲ろうの障がいを持った利用者さんの事例について話をさせて頂きました。利用者さんのことを全く知らない環境の中で、伝えていくことの難しさも痛感しました。私自身、ビデオ映像をもっと使用して話を進めていけばよかったなど、反省点の多い発表でした。ただ私のテーブルに参加された方は、いろんな職種の方でしたが、真剣に私の話を聞いて頂き、また発表後の語り合いの中でも、良い意見もたくさん頂くことが出来ました。同じテーブルの参加者の中で、看護師の方から、利用者さんが、部屋で裸で毛布に包まって寝ているのは、母体に還るような気持ちで、毛布に包まって、安心感を得てるんじゃないんですかという意見を頂きました。私の中で、利用者さんの

謎が、点が線になってつながっていく感覚を得ました。今回の看護師さんの意見を心の中にしっかりと受け止めて、今後の利用者さんとの新たな支援へとつなげていきたいと思えます。

2日目も小グループに分かれて、2人の学校の先生の取り組みの話を伺いました。2人の先生とも、生徒さんのことを真剣に考えて、取り組んでいる気持ちが伝わってきました。普段、なかなか聞けないお話を聞けました。特に理科の実験の話は、ブラナリアという生物が無性生殖等で子孫をふやしていくことを知り、知らないことを素直に知ることが出来て、楽しいひと時を過ごさせて頂きました。事例の話の後の語りの部分では、お互いの悩んでいることに対して、みんなで真剣に話をしていけたことが、とてもよかったと思います。

最後に、2日間のラウンドテーブルに参加をして思ったことは、環境や立場は違っても、人のことを思いやる気持ちの根っこ部分はみんな同じなんだと改めて、感じる事が出来ました。いい学びの場に参加出来たこと、感謝します。ありがとうございました。

福井ラウンドテーブルに参加して

桜美林大学／早稲田大学大学院博士後期課程 林 加奈子

私たちのグループでは、私の報告であった地域における実践（「東京、山谷における路上生活者と支援者との関わりの中から見えてきたこと」と福井大学教職大学院の院生による学校教育実践（「至民中学校での問題解決型の授業実践」）の二つの報告がなされたが、今回この2つの報告から、省察について、そして地域と学校教育における実践の違いについて考えさせられた。以下、大きく2つにまとめた。

まずは、共に語り、共に省察することの意味である。今回私が報告をしようと決めたのは、今の実践を自分の中で位置づけたかったからである。人に語り、聴いてもらうことによりそれが可能になるのではないかと考えた。実際、報告の中で語ることでこれまで漠然と考えてきたことがことばを通して自分の中で明確になったように思う。そして、このよ

うな語りを、分野を異にする人々が聴くことにより、共感する部分、疑問に思う部分が顕在化され、ここから自分の実践を客観的に省察する態度が生み出される。分野は異なっても、「ひと」に関わっている実践者に共通する事柄は多い。このような他分野の人々と共に省察することにより、自分の分野あるいは自分の狭い視野からは到底気づくことができなかった貴重な気づきが生まれる。このような営みが、さらに省察を深めてくれるのではないだろうかと感じた。

次に、地域と学校教育における実践の違いについてである。私の山谷地域での実践では、体系的に教育活動を生み出しているのではなく、活動に関わる医療従事者、ソーシャルワーカー、社会人、学生、路上生活者、生活困窮者が共に関わる中で、お互いが学び合う関係性を築いている。共に作業をす

ることや学習会、会議を重ねる中で、職業や立場という服を脱いだところにある人間と人間のつきあいを重ね、そこから様々な学び、つながりや連帯が生まれている。ここにはまず地域に暮らす路上生活者、生活困窮者が抱える課題がある。そして、それに共感し、当事者性を持ち、共に活動する外部者がいる。一方、学校教育における問題解決型の授業実践では、教師が問題を課題として設定し、生徒がその解決プロセスを辿れるような工夫がなされている。両者では、課題の設定のされ方が異なっていた。また、私の地域における実践では、支援者と被支援者という上下関係はない。特に私たちの活動ではこのような関係を作らないように注意を払っている。活動に関わる一人ひとりが、時に教えたり支援する立

場になり、また時に教えられたり支援される立場になるという動的な関係性がある。しかし、学校では教師と生徒という固定化されがちな関係性がある。さらに、学校と地域の関係を考えた場合、学校教育では、地域の人々に学校に関わってもらい、そこで学びが生み出されるようになっているが、地域における実践では、人が人と対等に関わる中で自然と学びが生み出されている。どちらが良いという話ではない。ただ、教育学をバックグラウンドとしてこなかった私には、地域と学校教育における実践の違いが、今回の2つの報告により浮き彫りにされたように感じた。今後は、学校教育にも目を向けていきたいと思わせてくれる非常に良い機会となった。

福井大学のラウンドテーブルに参加して

早稲田大学文学部3年生 八波 直樹

今回福井大学で行われたラウンドテーブルに初めて参加しました。最終日のみの参加となりましたが、まず参加してみて非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じました。「実践し省察するコミュニティ」という主テーマにもあるように、自分が実践したことを語り合い振り返り、第三者と意見交換をするという行動は、日々の日常生活を送る上で大切だと思います。今以上により良くして向上するためには語り合うことが必要だと私は思います。今回のラウンドテーブルにおいて改めて自分自身実践することと省察することの大切さを感じました。議題を掲げ問題解決に向けての提案、アイデア、あらゆる角度からの意見を戦わせることによって、重要度の高いことから実践していくプロセスが導き出されてくるからです。私が参加したテーブルは主に学校教育現場で行われている実践の報告を聞き、語り合うグループでした。初めは福井県教育研究所の加藤正弘先生の報告でした。ADHDやADDなど普通の学校教育において支援を要する子どもたちが現在増加する中で、ICT機器を利用し子どもたちの学びの変化を促した報告をされていました。支援員とその子が携帯電話のメール機能を使って、お互いでやり取りをしている事例です。私はこの話が身近に感じられました。と言うのも、私自身東京都の小学校においてボランティアでそのような支援を要する子どもたちに携わっているからです。その子どもたちは、突然情緒が不安定になることが多く教室で落ち着いて学習す

ることができないので、別教室での活動を行わなければなりません。指導が難しくどのように働きかけをしたら良いのかわからなくなるときがあります。ICTを活用した事例は初めて聞いたので自分自身刺激を受けて、たくさん質問をすることができ、今後の支援にも役立てようと思いました。しかし、まだまだたくさん課題はあると思います。それは支援員とどうしても長く接する彼らとどう担任教師は信頼関係を築くかということです。もちろん支援員との信頼関係づくりも重要ですが、一番基礎となるのは担任教師との絆であり、信頼関係あつての教育だと思います。どこまで彼らに関与して良いのか、どこまで自分の意思で指導して良いのか、時々感じるときがあります。支援を要する子どもたちは、全体への教科指導よりも大変なことかもしれません。どうしても一人の先生に任せっきりということも少なくありません。良い教育のためには教師同士の団結力がとても必要だと思います。校長も含めて校内全体で学校を運営しており、子どもたちを全員で育てていくといった「経営参画意識」を常に持つておかなければならないと加藤先生は話しておられました。お互いがサポートし合い、相談し合い、それを実行に移していく、そしてまたそれを先生たちで省察する。こういうサイクルを導入し職場の一体感を出すことは子どもの教育にとって一つの重要な要素であると考えました。今回のこの実践例の報告を受けて、支援を要する子どもたちへの新しい働きかけを学ぶ

ことができたのと同時に、学校を運営するとはどのようなことなのかを考えさせられた時間でした。ラウンドテーブルのような場所は自分の視野を広げる一つの方法だと思いました。

次回以降のラウンドテーブルでまた何か新たなことを得られることを期待すると同時に、今回知り合った方との討論も楽しみにしています。どうもありがとうございました。

福井ラウンドテーブルに参加して

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース2年／福井市明道中学校 北 典子

今回、「専門職として学び合うコミュニティとしての学校」のBグループに参加しました。至民中学校と美浜中学校の協働研究の展開と構成に関する取り組みについて報告がありました。その報告から、学校文化を育むには次の3つの条件が必要であると感じました。

- 既存の学校組織を変革した協働体制が定着し始め、教員集団の意識の変容と研究の進化につながっている。
- 教職員が学び合う環境の中で、教職員の志向性が協働文化を生み出している。
- それに呼応して、生徒も学び合う集団に成長している。

教師間と生徒間に生まれた協働関係が相乗効果となって、理想的な学校改革が着々と進んでいる事例紹介の後、学校教育のあり方や教師の意識についてさまざまな意見が交わされました。

私自身が、とても衝撃を受けた発言は次の2つです。

1つは、渡辺先生が言われた「教師自身が学び合う意義を感じているのだろうか、そこが問題である。」という指摘です。もう1つは、今春、福大教職大学院のストレートマスターコースを卒業し、地元の中学校で講師をされているTさんの苦悩に満ちた語りでした。黒板とチョークで進められる全教科講義式の授業実態に、2年間の学びの意味を問う葛藤と現状打破の危機感にさいなまれる日々を、切々と語る彼女の真摯さに圧倒されました。改めて旧態依然とした日本の学校教育

の実態を痛感しました。

教育基本法の改定以降、その趣旨を生かす教育改革の必要性が叫ばれながらも、広く現場に浸透していかない現実を知りました。本大学院に集う先生方が、当たり前の実践として共有する“授業改革”，“教師の意識改革”，“学校改革”は、実態離れした理想論なのか。“改革実行”に伴う労力に不安を感じ、保守保身に流れがちな教職員の意識を希望に変え、やりがいを見い出す原動力は何なのか。私は、同僚と同じ目標に向かって協働する経験から得られる“手応え感”が原動力に転換されるのだと思います。「コミュニティ」の意義と構造のメリットを再認識するとともに、協働関係の形成には意図的に仕組みを整え、学びを共有する場の設定が重要だと気づき、以下の3つを考えました。

- ①核となって“改革”を進めるリーダー的役割の教師1～5人を各学校に配置する。(学校規模に応じて)
- ②①の研究の核となる教師は、地区の授業研究部会で指導的な役割を担って教科研究の協働関係を構築する。
- ③小・中・(高・受験)・大学が連携し合い、時代の要請に応える授業改革を進めていくことに挑戦する。

この2日間で、スクールリーダーコースで学ぶ意義、使命、責任の重さを新たに自覚し、身が引き締まる思いです。

実践し省察するコミュニティ ～専門職として学び合うコミュニティ～

福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース2年／高浜町立青郷小学校 松井 昭男

岐阜市立長良小学校の竹浪孝士先生から「長良小学校における授業研究の考察と今後の展望」について話をお聞きした。長良小学校の歴史は古く、「研修校、研究発表校、教育実習校」の3つの使命を担ってきた学校である。この長良小学校の特徴としては、全校研究主題「『たくましさ』を培う創造」のも

と、個々に研究テーマを設定し、日々研修に努められている。一人一人が研究課題を明らかにし、年間の研究計画を作成する。そして、全校研究会(全校で行う研究会)、拡大部研(講師を招いて行う)、部研(互いに授業を参観し意見をし合う)を設定し、年間7～12回ほどの自主研修を行っている。授業

研究会は、授業者の研究に則り、主張点に沿って授業研究を行う。また、授業者の指導が有効であったか、参観教師は子どもの姿から意見を述べる。そして、子どもの姿から有効な手立てや支援の可能性を探っていくのである。その研究会において参観者は、授業者と子どもに対して、自身の教育観をぶつけるのである。厳しい雰囲気もあるが、教員として力量を高め合う教師集団がそこには存在する。互いに切磋琢磨しながら、子どもの学びに沿って研修を行われている姿に感動した。

おおい町立名田庄小学校の早川勇治先生からは、「協働研究をデザインする～研究主任のコーディネーター的役割」についてお話をお聞きした。研究主任として、同僚の先生方と共に研究を進めていくために、「授業づくりマニフェスト」「保護者向け指導案及び研究発表会」「授業研究のあり方」等様々

な取り組みをされている。授業者のモチベーションを高めるために校内研究会を活性化させ、そこに「価値」を見出し、授業者がその「価値」に気づくことでさらなる意欲向上になるように努めておられるのが心に残った。また、今年度は、授業づくりマニフェストを5サイクル(R-PDCA)から2サイクル(実践、省察)にするなど、さらなる向上を目指しておられる。発表を聞きながら早川先生の豊かな人間性を随所を感じる事ができた。

お二人の発表に共通していることは、子どもの姿がベースにある。子どもの存在を大切にしながら授業を進め、同僚と語り合い、悩みながらとにかくやってみることが大切であると感じた。また、そのような環境を作っていくことを我々ミドルリーダーは意識しなければいけないことも再認識できた充実した時間を過ごさせていただいた。

拠点校だより

福井東養護学校月見分校
和中 律英

1 学校の概要

福井東養護学校月見分校は、福井赤十字病院内に設置されている病弱児生を対象とした特別支援学校です。小学部、中学部、高等部の3つの学部と、該当学年の学習には参加できないが、小集団での学習が可能な児童生徒を対象とした支援教室が設置されています。病棟の1フロアを使っただけの狭い校舎ですが、その中で30名前後の児童生徒が

学習をしています。対象となる児童生徒は、福井赤十字病院に入院または通院している児童生徒を原則としていますが、近年では特別な配慮を必要とする慢性疾患や心身症(発達障害の二次障害として起因)などにより、他の医療機関で治療を受けている児童生徒が多く在籍するようになってきています。その結果、近年では入院児生は減少し、通学生が在籍者の大半を占めるようになってきているのが現状です。在籍割合の中では、高等部の在籍者が最も多く、全在籍者の約7割を占めています。

各学部で行われている学習活動は、それぞれの児童生徒に該当する小中高の各学校に準じた教育課程で授業を行っていますが、支援教室の一部の生徒を対象に自立活動中心の教育課程での活動も行っています。

学校を運営する校務部は、主に教務や教育相談・研修等の仕事を行う教務部と、主に保健・生徒指導・進路関係の仕事を行う指導部の2つに分かれています。



2 昨年度の研究テーマと内容

昨年度の研究テーマは、小・中学部・支援教室が『人と
の関係を育てる～授業作りの実践を通して～』、高等部が
『卒業後の進路を見据えたネットワーク作り』でした。
小・中・支援教室の研究では、日頃の授業の中から①学部
を中心にした授業公開と授業参観を行うこと、②授業公開
での授業記録をもとに、各学部・教室研究会で授業の振り
返しを行い、児童・生徒の様子や変化を捉え、教師一人一
人が実践記録をまとめることを柱としました。また、高等
部では、病気や障害のある生徒たちが、自分に合った進路
を選択し職業的な自立を図ることは、将来にわたって自立
し社会参加していくために重要であるという視点から、①
生徒一人一人が自分の適性を知り自己理解を促すことが
できるような授業づくり、②外部の関係機関(医療・福祉・
労働)との連携とネットワークづくりを柱にしました。年
度途中の研究会では、福井東養護学校本校の先生や教職大
学院の先生にも参加して頂き、途中経過を報告するととも
に、生徒の日頃の様子から今後の支援の方向性について多
角的な視野からの話し合いを行いました。

それぞれの研究の成果を持ち寄り、夏に中間報告会、秋
に全体研究会、冬に報告会と年3回の研究会を行いました。
それぞれの研究会では、学部・教室をミックスしてのグル
ープセッションを行い、お互いに所属以外の学部・教室の
研究について、子どもの様子の中で気づいたこと・気にな
ったことを話し合いました。その中で、子どもの様子につ
いて共通理解を深めるとともに、個々の教師が行ってきた
実践についても振り返ることができました。昨年度の秋の
全体研究会では、教職大学院の先生方や福井大学教育地域
科学部の生徒さんに参加して頂き、違った視点のご意見か
ら、いつもの校内研究では気づけなかった子どもの姿に気
づくことができました。

3 今年度の研究テーマと内容

今年度は、全学部・教室での共通研究テーマとして『児
童生徒のニーズに応じた教育支援の充実を図る』を掲げて
います。特別支援学校特有の授業である自立活動の時間の
目標(個々の児童・生徒の障害による学習上又は生活上の
困難を改善・克服するための知識・技能・態度及び習慣を
養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う「特別支援学
校学習指導要領より」)を意識して、週に2時間取り組ん
でいる自立活動の時間はもちろん、各教科・領域など教育
活動全体の中でも取り組みます。そこでは、①それぞれの
子どもの抱える困り感やニーズを共通理解し、②実際の授
業や活動の計画の中に活かしていき、③その活動を定期的
(学期に一度、一年を通して)に振り返ることに重点を置い
ています。また、年二回(6、10月)の授業公開週間や昨年
同様月1回の学部ごとの研究日、年3回の全体研究会(8・
11・2月)を通して、教師間の授業の見取りについて話し
合い、各々の教師が自身の実践を深めていきます。

4 今後に向けて

昨年度に比べ、本年度の児童・生徒数は減少しましたが、
児童・生徒一人一人の病状は様々です。抱えるニーズや障
害の改善・克服に向けた活動、支援の方法についても個々
に応じた対応が必要とされています。今年度は自立活動に
焦点を当てた研究を行っていくことで、個々のニーズを共
通認識し、年間を通した継続的・発展的な活動が展開され
ていく必要があります。

私自身も所属する中学部の生徒一人一人と日々接して
います。その中で、気づいたことや変わったことを学部の
先生方に話していくことで、共有できる生徒の姿を確認し、
日々のかかわりに活かすよう心がけています。それぞれに
生徒とかかわる中で、他の先生方の多様な視点から次の支
援方法を模索していく。特別支援学校ならではのそうした
多様な『見方』を活かしつつ、今後の実践を進めていきたく
と考えています。

院 生 紹 介

松見 浩司 まつみ こうじ

(高浜町立和田小学校)

新採用で高浜町に来て 19 年目になります。高浜中を皮切りに、神野小、内浦中、音海中、和田小と現在は 6 校目になります。

今までの教員生活を振り返ってみると、高浜中では、部活動指導、生徒指導、教科指導に力を注いできました。結果が求められることが多く、部活動の成績や自分が受け持ったクラスの平均点を上げることに必死だったように思います。自分のことをすることで精一杯だった私は、今振り返ると、あまり周りが見えていなかったのではないかと恥ずかしく思います。また、教員になって初めて同和教育について学んだ時期でもあります。当時徳島県板野中の森口先生が実践された全体学習(クラス全員が本音を語り合う学習)が、今でも心に残っています。

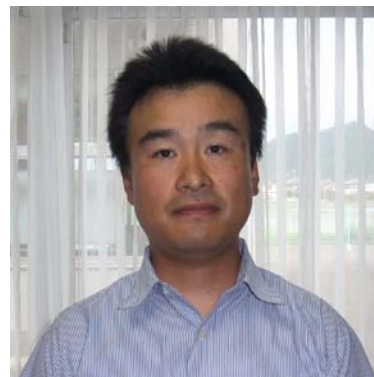
神野小では、コミュニケーション能力の向上に力を注ぎました。神野小学校では、研究指定校として、「話すこと・聞くこと」について研究実践を行いました。子どもたちが、生き生きと自分の言葉で語る姿は、今でも私の脳裏に焼き付いています。

内浦中では、研究主任として、コミュニケーション能力の向上に力を注ぎました。神野小で学んだ手法で、子どもたちが次第に自分の言葉で語り出し、変容していったことを今でも覚えています。成果をあげた反面、研究主任として、研究推進していく上で同僚を巻き込んでいく難しさを

知りました。また、この時から、コミュニケーション能力の育成だけではなく、主体的に課題を追究していく力も身につけていかなければならないと思うようになりました。

音海中では、主体的な学びについての研究を行いました。主体的な学びを実現するためには、課題設定が重要であることを改めて再確認した時期でもありました。今まで私が子どもたちに課してきた課題を振り返ってみると、子どもたちが本当に追究したい課題になっていなかったのではないかと思います。

そして、昨年から和田小に異動し、今年から教職大学院で学ぶことになりました。私が研究したいテーマは、「伝え合う力を伸ばす集団活動の在り方」です。また、校内研修会をどのように充実させていくかについても研究実践していきたいと思います。自分自身がどれだけできるかわかりませんが、周りの先輩方にいろいろと教えて頂きながら、学んでいきたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。



久島 晋 くしま すすむ

(越前市武生第二中学校)

本年度から、スクールリーダー養成コースに入学しました。平成 20 年度より 2 年間、福井県教育研究所に研究員として勤務し、本年度より学校現場に復帰したところです。教育研究所勤務の 2 年間は、学校という組織を外側から見つめることができただけでなく、これまでの自分の取り組

みを振り返ることもでき、とても貴重な時間となりました。そして、これまで



の自分の実践と理論を結びつけ、自分自身をスキルアップさせるためには、多くの仲間とお互いに磨きあうことが必要であると考え、教職大学院への進学を決意しました。

職場では、復帰1年目にもかかわらず、生徒指導主事を担当することになりました。生徒指導主事は、学校全体の生徒指導を組織的・計画的に運営してだけでなく、協働的な指導体制を作り上げていくために「調整機能」を発揮することが求められます。このような立場の重さはもとより、学級担任をしていた頃の自分の生徒指導観をそのまま出せないもどかしさや、問題行動に組織的に対応することの難しさを感じながら、日々の生活をおくっています。また、従来の対応では解決できない問題が数多くあるなど、問題行動の複雑さを再認識するとともに、自分自身の力不足を痛感しております。

これまでの合同カンファレンスやクロスセッションなどで、「語る」ことや「記録する」ことの大切さを学びました。相手に自分の実践を伝えるためには、自分自身を見つめ直し、整理することが必要です。また、自分の実践を

客観的に振り返るためには、実践の「記録」が必要になります。「語る」ことや「記録する」ことは、協働して生徒指導に取り組む際にも重要なことであり、これからの自分の実践に取り入れていきたいと考えています。また、教職大学院で学んだことを職場の中に広め、教職員が協働して、生徒指導をはじめ様々な活動に取り組める雰囲気をつくっていききたいとも考えています。

この教職大学院で多くの仲間とともに学べることを自分自身の活力源として、また、学校の生徒指導を推進するエネルギー源としていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

水野 雅人 みずの まさと

(福井大学教育地域科学部附属特別支援学校)

福井大学附属特別支援学校の水野と申します。この度、大学院教授でもある森校長先生のお誘いを受けて、入学することになりました。ただ、私は研究校に勤務しながらも、研究部に属したことはなく、学校の中で中心となって協働研究を進めて来たわけでもなく、さて何をするのか、まとめるのか、これから考えながらすすめていかなければと考えています。そんな私なので、大学院のお話を聞いても、果たして自分が適任なのか、何をやっていくのかなど迷ってしまい、すぐには返事ができなかったところが正直なところです。そんな時、Newsletterを読んでみると、大学で同期だった人の紹介が載っていました。私は小学校教員養成課程の卒業だったこともあり、懐かしく思うと共に、同年代の仲間の活躍する姿を見て、何か学べることもあるのではないかと、やってみようかという気持ちになれたように思います。さて、自分自身を振り返ってみると、新任校は、その年に高等部が開設されたこともあり、新採用

が8名という学校でした。学校が終



わって、教員寮に戻っても、学校と同じ若い先生方がいて、経験はなく至らないところも多くあったかも知れませんが、明るく元気な若々しい学校だったように思います。そして附属特別支援学校には、思いのほか長くいさせて頂いています。本校は、昭和46年に開校した県内最初の養護学校で、昭和60年以降、生活教育（生活の営みを教材として生きていく力を高める教育）を実践研究しています。転任した頃は、中学部の所属でした。子どもたちと一緒にリヤカーを引いて学校から3km離れた大学の総合自然教育センターまで、作物を植え付けたり収穫したりして戻ってくると、給食の時間が始まっていたこと、また、食事

も屋外で取り、一日中、外で活動していた日があったこと、全校合宿という全校縦割りの組活動で奥越のキャンプ場に出かけ、野外で、一晩中見張りをしていたことなど、懐かしく思い出されます。また、一人一人に応じた個別教育計画(本校の個別の教育支援計画)も作られるようになり、各学部の日々の活動もより個のニーズにあった洗練され

たものになってきました。また、全校児童・生徒による異年齢集団の活動である選択活動(現在のレインボータイム)が生まれ、週1回(半日~1日)のペースでの活動をするようになって10年あまり経過し、現在に至っています。以上、こんな私で不安もありますが、今年は、こつこつ取り組んでいかなければと思っています。

森田 史生 もりた ふみお

(福井大学教育地域科学部附属中学校)

本年度より教職大学院スクールリーダー養成コースに入学した森田史生です。教職20年目の社会科教員で、福井大学附属中学校に勤務しています。

自分の教員人生を振り返ると、様々な環境で仕事をさせてもらっていると思います。新採用から10年間は小学校に勤務し、その後、福井市教委の派遣社会教育主事として2年間、学校教育から離れ社会教育を担当しました。そこでは、地域教育の場である公民館を中心にした社会教育の推進、公民館主事の研修などが主な仕事でしたが、この仕事を通して、それまでは学校が教育の中心であると思っていた考えが大きく変わり、学校教育が終わっても一生学んでいく生涯学習の重要性を認識し、その生涯学習につながる教育を学校で行っていくことが学校教育の担う役割の一つであると考えさせられました。

そして現場復帰は中学校という、また新たな環境でのスタートとなり、教科の専門性についても一から勉強のし直しでしたが、部活動、生徒指導、進学指導など小学校とは違う指導も経験し、小中を見通した取り組みの大切さを考えることができた時期でありました。

4年間の中学校生活を経て、心機一転、日本人学校教員としてインドにあるボンベイ日本人学校で3年間勤務することになり、日本では経験できない体験を数多くしてきました。日本人として、社会科教員として、国外から見る日本・外国で感じる日本を体感し、厳しい環境で生活する

日本企業の子どもたちの、グローバルな視点で世界を見つめる考え方の違いに驚かされました。この海外生活の中で、国際社会で活躍する日本人の必要性や、広い視野を持つ日本人を育てる教育の必然性を肌で感じる事ができました。この経験は少なからず自分の人生観を変え、教員として子どもたちに教えるときの意識も変わったと思います。

帰国後は現任校である福井大学附属中に赴任し、2年目になりました。附属中の先生方は研究に対して高い意識と意欲を持ち、常に研究主題に迫るための授業実践を行っています。年間を通じて研究を進めているため、学校全体が一つの方向を向いて進む協働体制が確立しており、教員も生徒も協働探究が自然にできていると感じます。私自身、1年目は、自分の今までやってきた授業が全く違っていったことに愕然とし、子どもの筋で授業をデザインし、探究する授業づくりについて少しずつ勉強させてもらっています。教職大学院では、附属中の研究をさらに進めるため、どのようなことに取り組んでいけばいいか探究していきたいと思っています。



名葉 浩行 なば ひろゆき

(福井大学教育地域科学部附属小学校)

教職大学院スクールリーダー養成コースで学んでいる名葉浩行です。現在の福井大学教育地域科学部附属小学校に勤務して3年目となります。教職に就いてからは、今年で23年目になり、勤務校も4校目になりますが、新採用以来ずっと小学校勤務の経験しかありません。しかも昨年度まで主に5,6年の高学年を中心に担任していました。今年は、約20年ぶりに3年生を担当し、元気な子どもたち相手に楽しくやらせてもらっています。同じ小学生でも、「こんなにも違うんだ。」とかなりのギャップを感じ、戸惑うことも多々あります。しかし、それが新しい発見でもあり、やりがいを感じています。

附属小学校では今年度は、『協働して学びを深める授業をつくる』を研究テーマに掲げています。授業の中で仲間とつながり、様々な学びをしていく子どもの姿を見出し、一人での学びと仲間との学びを相互に関連させながら、学習を深める工夫に努めます。そのため、低・中・高学年の3つの部会に分かれ、それぞれの学年で見られる子どもの姿を出し合いながら研究を進めています。

私も今年度より研究部に所属し、中学年を担当しています。低・中・高の3つの部会でそれぞれ公開授業を行い、授業で見られた子どもたちの姿を話し合い、子どもたちの現状をもとに協働して学びを深める授業づくりについて考えていきます。子どもたちの協働する姿、さらに学びを深める姿をどのように引き出すか、今年度のテーマに迫る



ような話し合いを行います。特に中学年では、自分の思いや考えをもち、他者を認めること

で、自分の思いや考えを深める授業をつくるために、目の前にいる子どもの姿を見つめることから進めていきたいと考えています。そして、子ども同士で高め合い、新たな学びを見つけていく喜びを感じさせる授業をめざします。子どもたちの学んでいる姿を捉え、子どもたちに必要な学びや更なる学びに突き進むためにどのように授業を組み立てればよいのか、子どもたちが協働して学びを深めていくことができる授業づくりについて、教師も協働して、取り組んでいきたいと考えています。

教職大学院では、大学の先生方やいろいろな学校の先生方と勤務校の様子や取組、そして悩んでいることなど自由に話し合う時間をもつことができ、とても良い刺激になります。この教職大学院で学んだことを自分の授業づくりや教師間の協働ということにいかしていくことができるように頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

富澤 宏二 とみざわ こうじ

(県立藤島高等学校)

今年度より教職大学院に入学しました富澤です。

新採用以来、ほとんど高校の普通科で勤務してきました。最初に勤務したのが進学校で、そこに8年お世話になりました。最初が街中の進学校というのは同期の中では珍しく、教員のスタートを田舎の学校から始める他の人たちの方がのびのびとやれているのではないかとうらやましく思ったこともありました。しかし、私にとって20代の8年間はとても楽しい8年間で、若さに任せて私なりに充実した日々を送ることができました。若くて意欲にあふれてい



る時代に、進学校で教科指導、進学指導中心に学べたことは、私にとって大きな財産です。

特に教科指導については、大学入試を意識した教材に触れることで、自分の力を高めることもできたように思います。国語の力を付けるには教員もやはり問題を解き続けたいわけにはいきませんが、若い時代にいろいろな文章に触

れ、勉強できたことは自らの専門性を高めるため大いに役立ったように思います。

また、若さゆえもあるのですが、自分なりに授業に工夫を重ねていたようにも思います。自主的な研究会にも参加して、拙いながらもいろんなことにチャレンジしていました。芥川龍之介「羅生門」や、夏目漱石「こころ」、中島敦「山月記」は毎年のように扱いますが、当時はいろいろとやり方を変え、工夫を凝らしていました。当時の福井大学の先生方にもいろいろ教えていただきました。しかし、2校目、3校目に転勤して、自分の蓄えの中で授業ができるようになったり、いつの間にかなんとなく自分の型というものができたりして、さほど工夫をしなくなっ

ていました。

今回、教職大学院に入学したことで、改めて授業のあり方について見直すチャンスを得たことは大変ありがたいことだと思っています。40代後半になると、授業はできて当たり前と思いがちですが、これを機会に再度自分の授業を見直し、まずは授業を大切にしたいと考えています。もちろん、せっかくの教職大学院ですから、自分一人の課題としてではなく、教員間の協働も視野に入れつつ勉強していきたいです。教科に限らず、いろいろなテーマを抱えているので、それらを多角的に捉えながら、この2年を頑張りたいと考えています。どうぞよろしくお祈りします。

戸田 典子 とだ のりこ

(県立福井東養護学校)

本年度よりスクールリーダー養成コースでお世話になっております。私は、新採用からの19年間、小学校で通常学級の担任をしていました。平成18年度より現在の勤務校である福井東養護学校に赴任し、病弱・肢体不自由部小学部(以下、病肢小学部)の子どもたちと過ごすようになって5年目となりました。病肢小学部には、慢性疾患や肢体不自由のために入学してきた子もいれば、隣接する県立病院や子ども療育センターに入院や入所し、転入してきた子もいます。後者は、病気やけがの回復、治療終了とともに転出し、元の小学校や養護学校に戻ります。転入生の在籍期間は、数年に渡る場合もありますが、大抵は数か月～半年で、中には1か月に満たない場合もあります。車いすを使っている子や装具を着けている子、酸素ポンプを携帯している子、常時マスクをしている子がいますが、トイレ介助、体調や体の動きに配慮する必要があるものの、知的な遅れがないため、教科学習では小学校と同じ教科書を使っています。道徳や総合的な学習の時間、外国語活動があるのも小学校と同じですが、特別支援学校なので、通常の学校にはない自立活動という授業もあります。

♪チームスマイル、みんな元気です。チームスマイル、今日も頑張るぞ。ぼくは、にこにこ、私にもにこにこ、みんなにこにこ、スマイル、スマイル～♪ これは、私たちのオリジナル曲「チームスマイルの歌」です。「チームスマイル」とは、昨年度、自立活動の授業で結成した

子どもたちの劇団名です。今年度も劇を続けているのではないのですが、子どもたちも先生もみんな合わせて病肢小学部全員が「チームスマイル」なのです。この歌には、一部に手振りも付いています。授業では低・中・高学年の3教室に分かれますが、朝の会は、1つの教室にチームスマイル全員がぐるっと輪になって座り、行います。そこで歌うのです。「みんな元気です」とガッツポーズをし、「今日も頑張るぞ」と握り拳を力強く突き上げると、力が湧いてきます。「スマイル、スマイル～」と歌いながら子どもたちと目を合わせると、スマイルどころかお互い「ガハハハ」と笑ってしまいます。そして、みんなが登校できたことをみんなで喜ぶ毎日です。また、先生同士のチームワークの良さも子どもたちのスマイルにつながるとは思いますが、その意味でも私は、病肢小学部の先生たちに感謝しています。

病肢小学部の子どもたちに、小学部合同自立活動の授業を通してどのような支援をするとよいのかを探りたいと考え、教職大学院で学ばせていただくことにしました。まだまだ勉強不足の私ですが、「チームスマイル」の笑顔を増やすために頑張りたいと思っていますので、皆様、ご指導をよろしくお祈りいたします。(挿絵は、病肢小学部5年Mさんがかいてくれた戸田先生です。)



島田 一博 しまだ かずひろ

(県立羽水高等学校)

羽水高校の島田一博です。今年度から教職大学院で学ぶことになりました。せっかくのチャンスなので2年間精一杯学び、これから出会える生徒たちのためにも力をつけたいと思っています。

さて、校務分掌で今年度から「教育相談担当」になりました。相談に来る生徒にいきなり、いいカウンセリングなどできるはずなどありません。私に今できるのは、治療ではなく、予防ではないかと考えました。また私は言葉の持つ強さ・素晴らしさを信じています。担任時代は、黒板の右隅に毎日生徒へのメッセージを書いてきました。そこで、B4版の紙にメッセージを書き相談室の入り口のドアにはっていくことにしました。メッセージの内容は、担任時代は激励タイプのもが多かったのですが、今回は生徒たちが羽水高校に来てよかったなど感じられるようなもの、読んで優しい気持ちになってくれるようなものにしていきます。

今まで書きたいいくつかのメッセージをあげてみます。

- ・春先の雨が多く寒かった時期には、
「寒い日、雨の日が続いて大変だね。せめて心は晴れ晴れ（晴れの文字の下には太陽のイラスト付き）しよう。」
- ・強歩大会の時には、
「今日『ほっ』とする日になるといいね。」
- ・生徒が亡くなった時には、
「タイムマシンはたぶん無い。だから今を大切に。」
- ・ワックスがけの翌日には
「廊下も階段もピカピカ（ピカチュウの絵を二匹描いてピカピカと読ませました）でうれしいね。
ワックスがけ、ごくろうさん&ありがとう」
- ・『うすい』高校に親しみ・誇りを持って欲しいので



「【ウ】ルトラ，【ス】マイル，【イ】ッツ，OK！」

「前向きになると，【う】まくいく，【す】っきりする，【い】い気分になる。」などです。

始めは、あまり生徒の反応は感じられなかったのですが、続けているうちに廊下から、私の書いたメッセージを読む声や「あつ、はりかえてる。後で見なあかん」とかの声が聞こえるようになり、とても励みになりました。そこで、もっと生徒たちを巻き込みたいと考え、6月は「大切にしたい言葉しりとり」というテーマで、しりとりをしました。始めは、私一人で紙に、「笑顔→親→優しい→命→知力→工夫→羽水→？」と言葉をつないだのですが、途中からも一枚紙をはり、生徒たちに次の言葉を書き込んでもらい、その中から私が一つ言葉を選び、しりとりを続けるようにしました。このしりとり企画はかなり好評で、先日50語つながった段階で、一旦終了したのですが、再開を望む声も何個か届いています。今も定期的にメッセージをはりかえながら、しりとりが続く生徒参加型の企画を検討中です。現在約1,000名の羽水高校生の内、何名がこの取り組み、メッセージに気が付いているか分かりませんが、口コミで少しずつ広がって行って欲しいです。そして、一人でも多くの生徒におだやかな優しい気持ちになってもらいたいです。これからも配信を続けたいし、学校祭では、全メッセージを一括して再掲示したいとも考えています。

お知らせ

平成 23 年度福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院） 学生募集 スケジュール

出願期間	平成22年9月6日（月）～9日（木）
ガイダンス	平成22年9月11日（土） 10:00～12:00 アカデミーホール
選抜期日	平成22年9月25日（土） 9:00～ 教育地域科学部 1号館
合格者発表	平成22年10月5日（火） 10:00
入学手続	平成22年12月13日（月）～16日（木）

問い合わせ先：福井大学学務部入試課
[本学ホームページ <http://www.u-fukui.ac.jp/>]

教職大学院集中講座見学会&入試説明会を行います

日時 平成22年8月17日(火) 11:00～12:00

16日, 18日, 19日, 20日も相談に応じます。

場所 福井大学教育地域科学部 1号館 6階 コラボレーションホール

※参加希望者は事前の申込みをお願いします。

希望日, 氏名, 連絡先を記載したメールを dpdtfukui@yahoo.co.jp へてお送りください。

Schedule

7/21 Wed -23 fri	夏の集中講座 1a (9:30-17:00)	8/16 mon - 18 wed	夏の集中講座 3a (9:30-17:00)
7/27 tue -29 thu	夏の集中講座 1b (9:30-17:00)	8/19 thu - 21 sat	夏の集中講座 3b (9:30-17:00)
8/1 sun -2 mon	教育のアクションリサーチ研究会 @熱海 (任意参加)		
8/2 mon - 4 wed	夏の集中講座 2a (9:30-17:00)		
8/5 thu - 7 sat	夏の集中講座 2b (9:30-17:00)		

※集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択(abの組合せ自由)

[編集後記] 今回、ニュースレターの編集に初めて関わりました。学校現場にいたときは、ほぼ毎月送られてくるこの大学院からのメッセージを、パラパラと写真を中心に斜め読みして（閲覧の認め）印鑑を押していた自分の不明を恥じながらの作業でした。その反省？を生かし、カラーページに6月に行われたラウンドテーブルの様子を、写真を中心に編集しました。新しい時代に生きる専門職同士の熱き語らいとエネルギーを感じとっていただければ幸いです。(川上純朗)

教職大学院 Newsletter **No.24**

2010.07.27 発行

2010.07.27 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp